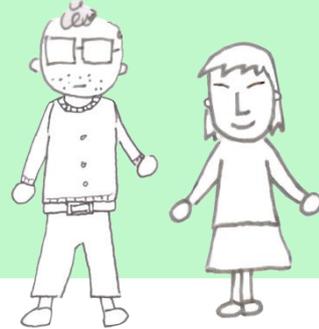
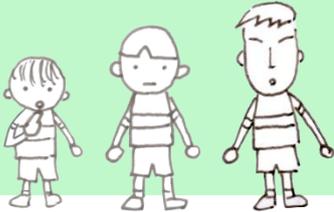


知的発達障害の家族の

日々5

大谷 多加志



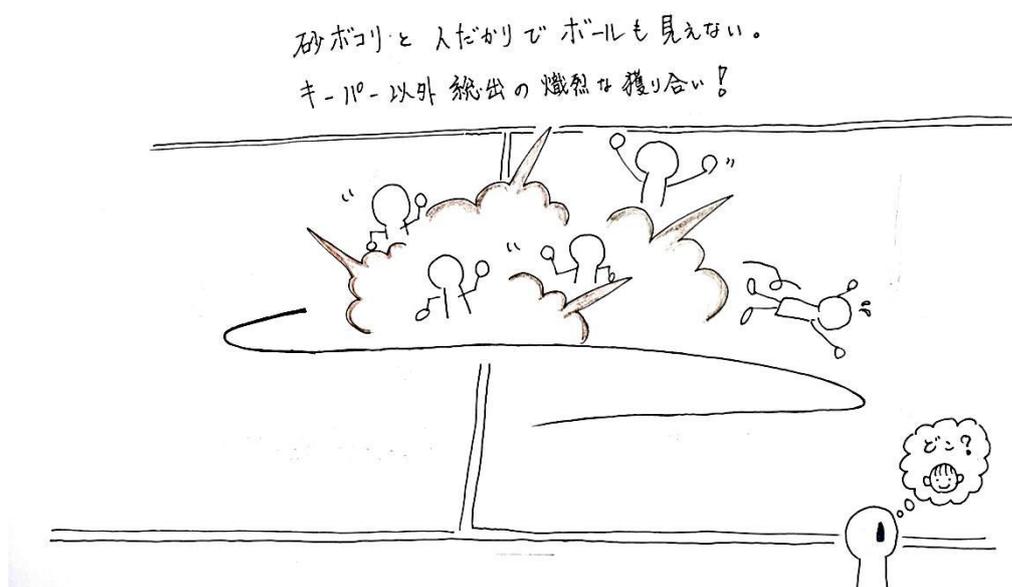
サッカー

ここ数ヵ月、6歳の息子の野球へのはまり具合が激しい。テレビでナイターを見ていたのが9月頃、10月にペナントレースが終わる頃にはタイガースの打順と先発ローテーションは把握済だった。野球が共通項になって仲良くなった友達もいるようで良いのですが、家でも隙があれば「野球しよう」とせがまれ、疲れ切って帰宅した日にはなかなか厳しいお誘いになっています。

そんな中、ふと思い出したのは、弟がサッカーをしていたこと。弟は中学校までは地域の学校の支援学級に通い、高校からは支援学校の高等部に通いました。その支援学校に、サッカー部があったのです。もともと、サッカーに関心があった風は全くありません。はっきりと経緯を聞いてはいないのですが、相性のよかった担任の先生がサッカー部の顧問だったので、それが一番の理由だったのではないかと考えています。

サッカー部に在籍している間、弟の体に起こった変化があります。お腹がへっこみました。脚は一回り太く、たくましくなりました。一度、何かの機会に学校で練習試合をしているところを見たことがあります。ボールが移動すると、敵味方とも選手の大半がいっせいにボールを追いかけます。結果、ボールに対する選手の密集度がすごく、ボールがどこにあるのか遠目からは全くわかりま

せんでした。得点が入った時も、結局最後に蹴ったのは誰なのやらでしたが、そんなことはお構いなしに盛り上がり、楽しそうな空気でいっぱいではありませんでした。終始そんな展開で、20分ハーフで前後半と試合をするので、運動としては100mダッシュをひたすら繰り返しているようなものだったのかもしれませんが。お腹がへっこんだことも、すごく納得が이었습니다。



そんなサッカーも卒業すると機会は一気に無くなりました。卒業当初は、OBで集まったり、仕事場と学校が近かったので仕事上がりでOBとして顔を出し、一緒に練習をしたり、後輩にジュースをおごって先輩風を吹かしたりとそれなりには関わっていたようです。しかし、卒業から2年経つと現役の頃の後輩もいなくなり、徐々に足が遠のいていきました。同期のOBの集まりも、メンバーそれぞれの事情（新しい仲間や、転居、不調など）により数年で終わりを迎えました。

このこと自体は自然なことだったのだろうと思います。ただ、ふと振り返ってみると、あれほどサッカーをしていた時期でも、部活動以外の場で弟がサッ

カーに興味を示している様子を見たことは、なかった気がします。例えば、テレビでサッカーの試合を観ているとか、サッカーの練習を家でもしようとするとか、何か変化があってもよかった気がします。特に目立った変化はありませんでした。

そう思うと、サッカーは、人に支えられて楽しめていたものだったのでしょう。先生や友達、後輩がいることがまず第一で、活動の共通項としてサッカーがあったということなのだと思います。仕事が終わってから、電車を見に行く他には、これといって好きなものを見つけられなかった印象がある弟。お腹も、ポッコリと出てきていました。力と時間をいくらでも注げる「好き」が見つかったら、帰宅後や休日の過ごし方も、少し違ったのだろうか、と考えてしまいます。

団先生の「木陰の物語」に「好きになる力」というお話があります。周りからきっかけを与えられることはあるのですが、最終的に無条件で「好き」と思うことは、自分の力でしかできません。障害をもつ成人期の人たちの「余暇」が話題になることも少なくありません。「好き」がどのように育まれてきたのか、結果として目に見えるのは大人になってからなのかもしれません。